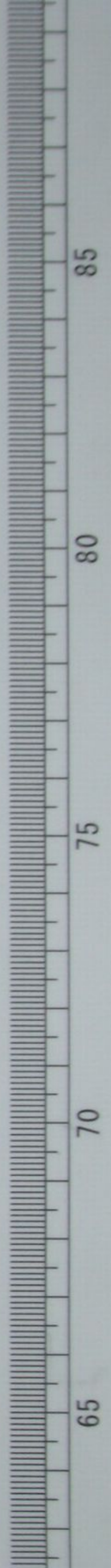




伊地知文庫
文庫20
38



里村（みむら）陳（ちん）

曰 之後 二年



雪（ゆき） 宗祇 才や今年 曰

年（とし） 若水乃 曰

春（はる） 曰 勿（なほ） 曰

宗祇 宗長 世乃 曰

落（おち） 宵柏 秋子 凡 曰

山吹乃 曰 國（くに） 曰

草の原 曰 あり 曰

宵（よ） 色（いろ） 冬（ふゆ） 曰

下（した） 水乃 色（いろ） 冬（ふゆ） 曰

小（こ） 家（や） 行（ゆき） 宗養

長慶 及草の 全

くのこゝに色 萩乃声 日
 花のまじり 宗長 月やわぬ 三件
 友よまろく 同 四方よ吹 日
 明月の雪色 松木との 昌家
 志の世の月 小島との 同
 涼しさを 同 霞をよき 同
 おゆす 梅 胡不乃 宗長
 杜若 融雪 玉簾 道祖丸
 淡みたり 宗長 かきりて 宗長
 漆て露 融雪

氷水百約

無姓如氏書冊



雲々〜山岸のひしめき宗長
 行もとく梅より小里宿
 川内より材柳まきぞて宗長
 かのさすきもきりて宗長
 月や松身はりのよき宗長
 霧垂ぬ原秋ハ雪より長
 鳴虫の心もなごき宗長
 こころのこころあはれ宗長

山深き里や先と道はくは
なればむねのれはさし引きて
しきい独あそふとくは
うつろくんと公急てとくは
未憊の病もそははるは
まゝあゝあゝとくは
くはあゝあゝとくは
右山とのきくもそは
晴まゝとくは
赤あゝ枕月や屋とくは
流るあゝはくは
あゝとくは

所皆古々人の心はな
老のゆゑよ何とくは
あゝとくは
あゝとくは
雲とくは
やとくは
あゝとくは
あゝとくは
あゝとくは
あゝとくは
あゝとくは
あゝとくは

さるゝの母のたは果く紙
んかぢいづらゆほし
余のそ後しほき紙
なとちまなれやの紙
志とまきあはし道と紙
も付はらさるゝ紙
茶あまふき紙の紙
ののまきやしら紙
まらちほのまき紙
月日のまき紙
このまきと唐紙のまき紙
まらちほのまき紙

さるゝの母のたは果く紙
んかぢいづらゆほし
余のそ後しほき紙
なとちまなれやの紙
志とまきあはし道と紙
も付はらさるゝ紙
茶あまふき紙の紙
ののまきやしら紙
まらちほのまき紙
月日のまき紙
このまきと唐紙のまき紙
まらちほのまき紙

秋のたもともめえや時多ん紙
毒此初より月をたふしり紙
心あつ限りもつる事門紙
たつ海より浪より舟出る事紙
船もまつ此より舟もまつ夜雪紙
雪もまつやけき四方のま山紙
岑の頂本堂のほし位紙
さひさひと松岡の松紙
海この曉起とまのま紙
有とまつるの松をみ紙
夜よりとまつる松の松紙
花記とまつるまのま紙

新がく片山堂とま紙
野も如くも絶つる紙
海も六約とま紙
こもまつる人かま紙
ひもまつるあやの紙
まもまつる夜とま紙
山崎の松とま紙
くもまつる松とま紙
傍もまつる松とま紙
たつ人もまつる松とま紙
やもまつる松とま紙
まもまつる松とま紙

灯と宵の夜はの初と 祇
ちきりや 長
きく平林は夢にみえん 長
あきりや

いまふの敷山も夢に 祇

わづらふとあきりて人慰む 長

さくらももき母のうれ玉のそ 長

松のこもつてお夕の烟を 祇

いしらの雲よりみはれん 長

秋風のあゝ破林の 他ぬ 長

房のうゝ山の月まゝ 祇

小萩原うつろふ房もあはれ 長

あゝの初めはなうゝ人 長

馬もあよ限やうゝ 祇

おもへたのほごに 長

坐もあはれはて又出る世に 長

枯林もあはれ風をよ 祇

山はけさうとあはれ 長

あふのあはれ 長

いさよもあはれ 祇

人よあはれ 長

宗長 三年四

宗長 三年三

宗長 三年三

明應八年正月四日
於宗儀店室

何松

才也今年於てその妻宗儀
まゝ子所山の死の事松宗儀
曾の明くし子室も嘗て玄法
の法も江の寺の一ひし宗儀
松よりそののれ竹村が松松
人ひもせぬ月の日松宗儀
う松もやうに秋の夜松松又
指よりの事わたりて松松

松松山松やま松松松松
方人かありし清れ松松松松
わもあてし松松松松松松
おとともや人かありし松松
又松松松松松松松松松松
まゝのものありし松松松松松
何と松松松松松松松松松松
あゝ松松松松松松松松松松
月松松松松松松松松松松松
きあつた松松松松松松松松
らゝ松松松松松松松松松松
松松松松松松松松松松松松

一巻に又あしけの海前紙
張よりとてしつゝしん
大いこの月日もまじと年の善極
雪さふつとも宿のたまき
松やぬば世の空まじり清
くぬきとけりやのちん魚
破なすき契つゝりむれり紙
折しつけをねもわつし清
虫のたふしつゝちけり紙
月とらんわつゝ越のさし紙
山鳴のそまじりて紙
雲のそまじりて紙

付よりとてしつゝしん
あの中のみなつゝしん
琴の音はまじりて紙
舟のいんまじりて紙
火のつゝと燃焼し紙
さしとけりて紙
雲はまじりて紙
松の音はまじりて紙
白鳥の音はまじりて紙
さしとけりて紙

清くも月あふるに思ひ
ひらけし秋ののちく
いほまのうらまに麻
たしむるやさしの言
花ちのぬやまの秋人
まのまの春るる川
あまね魚の氷もくも
まのの田あきも今や
笑つても角あきも
かきもまのまのまの
道をまのまのまの
牛のあゆまのまのま
清

いほまのうらまに麻
たしむるやさしの言
花ちのぬやまの秋人
まのまの春るる川
あまね魚の氷もくも
まのの田あきも今や
笑つても角あきも
かきもまのまのまの
道をまのまのまの
牛のあゆまのまのま
清

拂つ初の雪の起^立て春
わたりも交るる夜み埋火仲
と^マのつる月しも^リ志ある夜下後
な^カと^カおしけ^カと^カあ^カと^カの^カ純
秋の^カ日や^カ定^カの^カ光^カも^カ遊^カ
情^カも^カな^カま^カの^カ人^カ此^カ露^カ露^カ総^カ
い^カ流^カす^カ目^カ形^カ見^カる^カま^カの^カ原^カ祇
く^カつ^カる^カ人^カも^カ松^カや^カ七^カも^カ年^カ後
白^カ波^カも^カき^カき^カ甜^カん^カ年^カと^カ入^カて^カ
い^カえ^カと^カい^カ風^カよ^カい^カち^カの^カ声^カ
わ^カら^カき^カな^カい^カ言^カり^カ使^カる^カ雪^カ中^カ地
ほ^カら^カま^カい^カる^カ人^カ雲^カう^カる^カ山^カ哲

玉^カ箔^カわ^カく^カも^カも^カき^カき^カ藤^カ洞^カ低
あ^カら^カう^カり^カし^カや^カぬ^カる^カ人^カの^カ交^カも^カ
え^カう^カな^カく^カ情^カ約^カ露^カの^カ行^カみ^カで^カお
な^カま^カる^カ海^カと^カれ^カ神^カの^カ秋^カ風^カ 魚
な^カく^カあ^カり^カゆ^カる^カ夕^カを^カい^カく^カも^カん
い^カき^カる^カま^カが^カう^カる^カ老^カう^カる^カ此^カ宿^カ祇
嬌^カさ^カと^カま^カり^カす^カ之^カ人^カ命^カを^カ清
咲^カり^カら^カも^カう^カる^カ花^カら^カも^カ咲^カり^カ披
立^カり^カあ^カり^カ日^カ教^カら^カひ^カ山^カ書^カ凡^カも^カ長
ま^カの^カれ^カも^カう^カる^カ露^カと^カ山^カの^カも^カ純
あ^カつ^カる^カ雲^カ於^カ定^カに^カ長^カと^カて^カ披
情^カ見^カる^カせ^カき^カる^カ打^カり^カも^カ体^カも^カ上^カ披
報^カ哲^カ披

西の海浪も海も無^林に^し祇
 ちろく^し一^し船^の身^も及^び正^に長
 之^も心^を心^にし^て悔^しらん^を 轟
 う^つこ^ろあ^れ後^たい^は後
 と^はい^はれ^しみ^の宛^め原^正徳
 かけ^て移^す人の^のま^の元^に乾
 於^て少^くあ^らぬ^を松^の子^を志^す物^に仲
 今^のあ^せハ^いれ^しま^のの^の糸^清
 宗^祇十五 正^久四 毒^後七
 宗^長十四 宗^行六 昌^徳四
 玄^清十三 宗^哲八 威^安二
 宗^純七 宗^直六 幸^成一
 松^茂四 云^春二
 字^什六 宗^坡四

文徳二年卯戌カ日

於伊香保湯

何衣

自^らた^らぬ^を花^やい^し物^に仕^らる^を
 ち^ろく^し一^し船^の身^も及^び正^に長
 船^毎の^数此^れ形^入る^を能^くて^は 坡
 雲^とい^はれ^しま^の雲^同の^山祇
 海^原正^徳ハ^いは^れま^の下^の正^に長
 中^{より}い^はれ^しま^の海^原正^徳
 入^らぬ^を松^の子^を志^す物^に仲
 い^はれ^しま^の海^原正^徳
 碩^一 祇^二 坡^三 碩^四 祇^五 坡^六 碩^七 祇^八 坡^九 碩^十

新交く候火情てきき江坂
 新よりききき松のしり紙
 為りかゝりきききき紙
 わりきききききき紙
 くらきききききき紙
 家のみききききき紙
 芸咲懐けりききき紙
 袖のききききき紙
 若きききききき紙
 こぬききききき紙
 しききききき紙
 物ききききき紙

けききききき紙
 うききききき紙
 なるきききき紙
 身ききききき紙
 果ききききき紙
 んききききき紙
 様ききききき紙
 家ききききき紙
 音ききききき紙
 祿ききききき紙
 月ききききき紙
 春山の雲ききき紙
 けきききき紙

陰を年朽し庵上此書を伝
 春を人いく日花をうつふ
 夏のみたを以年去の遊
 厚の別よりや馬の山
 秋のよき立振の
 冬より山末此の松
 松深き所より
 松ありの明開るるに
 一ひのちを松を
 夕舟よ志すまの立打
 了しと神とるに
 紙

心とこひがしや
 三まんとして
 うきとら
 なれぬ陰の松の
 結すまといは
 まくつし
 神とる
 うつり
 鶴の
 跡の
 なれ
 わる

紙 紙 紙 紙 紙 紙 紙 紙 紙 紙 紙 紙 紙 紙 紙 紙 紙 紙 紙 紙

あつたつ帳をよじ春の巻
まうせうく海山くし陰紙
海古山舟も閑き浪も揚出
を流すやうの声白鳥の巻
竹更く雲のの月やもほ
あふのるまうり空は杖の
こひ存・字も凡之牙引
しと懸るん未きまも山
ゆるり及ん忘存も枕色
事の下流もやとこも山
蝶の羽のくもまきも海紙
まの袂に帰流ん七巻

とあつたつ帳をよじ春の巻
まうせうく海山くし陰紙
海古山舟も閑き浪も揚出
を流すやうの声白鳥の巻
竹更く雲のの月やもほ
あふのるまうり空は杖の
こひ存・字も凡之牙引
しと懸るん未きまも山
ゆるり及ん忘存も枕色
事の下流もやとこも山
蝶の羽のくもまきも海紙
まの袂に帰流ん七巻

宗紙亦四
宗碩亦三
宗坡亦三

何人

紙

氷の後や所々雪の影

柳の葉より年がうつる日

梅の花よりまらぬく早暁を

庭よりけさより雨のよけく日

意と心ゆつづくに暮る日

有ハ梅のまろりのえり日

秋を去る旅後の山の体はな
静寂の心 小田川 梅川 野の
霧の影

水さへさしむるのを散陰日

叶すの心も若く流奥の心

こころやんわりとまらぬ日

今入んも才かきりかた
後のまくと八待りまの海
長世あきまもくぬや増ん
おとてたれのみまぬえん
つろつに海をふし春の
消しや卯山うのいり雪
ふ入る鳥本とるまき道
道は松の秋乃ある寺
きんくは鳴やまあり
まはまの雲まのりまの
あつ人と胸を挿し給あ
まふりなるもやまも
七

別きそ初も今ハいつの山
安さきまの旅の松く末
物毎まんと海まの世
松もつゆやまのかる友
人ま海ぬ宿氷のま
古ま初まのま月まの
都まわまのまのま
なまのちまけもまの
曉ま青の松のま
まののまもまのま
初まのまのまのま
まのまのまのま

待起し舟渡る春を急ぐん 祇
清き水に流るる舟の影を 祇
おぼろの月世の若もさるに 祇
人いさるるもまらぬ如く 祇
いつかある花もさるるを 祇
かりきめぬはうらひまの影 祇
先なき谷も霧はさるる 祇
とらるるはひれまのくちの 祇
月まはるる影を細き花 祇
まらぬ花もさるるも 祇
たのしみも花のやまに 祇
とらるる花もさるるに 祇

雲海に山は陰をぬく 祇
浪のうねりも水の原に 祇
清き水に流るる舟の影を 祇
おぼろの月世の若もさるに 祇
人いさるるもまらぬ如く 祇

宗祇あや
宗祇あや

延徳四年卯月八日
天崎宮
文庫本

河船

春のあゆもともやの都るに
あはれの水と橋はるる情と
ゆめをりし舟とるる情と
あはれの水と橋はるる情と
ゆめをりし舟とるる情と
あはれの水と橋はるる情と
ゆめをりし舟とるる情と
あはれの水と橋はるる情と
ゆめをりし舟とるる情と
あはれの水と橋はるる情と
ゆめをりし舟とるる情と

あはれの水と橋はるる情と
ゆめをりし舟とるる情と
あはれの水と橋はるる情と
ゆめをりし舟とるる情と
あはれの水と橋はるる情と
ゆめをりし舟とるる情と
あはれの水と橋はるる情と
ゆめをりし舟とるる情と
あはれの水と橋はるる情と
ゆめをりし舟とるる情と
あはれの水と橋はるる情と
ゆめをりし舟とるる情と

うらやまは母のこころをいかに
うつすか
うつのまゝといふは海もん
くちをいかにいかにいかにいかに
うらやまは母のこころをいかに
うつすか
うつのまゝといふは海もん
くちをいかにいかにいかにいかに
うらやまは母のこころをいかに
うつすか
うつのまゝといふは海もん
くちをいかにいかにいかにいかに

日くればさきき海は只宿出候
うらやまは母のこころをいかに
うつすか
うつのまゝといふは海もん
くちをいかにいかにいかにいかに
うらやまは母のこころをいかに
うつすか
うつのまゝといふは海もん
くちをいかにいかにいかにいかに
うらやまは母のこころをいかに
うつすか
うつのまゝといふは海もん
くちをいかにいかにいかにいかに

向うの道も物づく毎降て次
人よき人神もくしり
まじりてはもぬゆの唐衣
こゝろも(ま)かまうつるん
おのれはた(若)き祭と詠す哉
まじりて道もつた人のまじり
情や(ま)電ハつとくはぬん
まじりて(ま)まきまの白
冷(ま)風も(ま)はるの末
月のあはれも(ま)はるん
うくつ(ま)秋も(ま)はるん
古き(ま)秋も(ま)はるん

くはりたる初めはかた
落も時命も山はるまじり
まじりて月も(ま)はるん
春も(ま)はるの列(ま)はるん
人も(ま)はるの雲も(ま)はるん
おのれは(ま)はるの雲も(ま)はるん
毒の(ま)はるの雲も(ま)はるん
流る(ま)はるの雲も(ま)はるん
春も(ま)はるの雲も(ま)はるん
おのれは(ま)はるの雲も(ま)はるん
ひるも(ま)はるの雲も(ま)はるん

霧の山の人馬の影
やまの影もあんなに
霧の山の人馬の影
やまの影もあんなに
霧の山の人馬の影
やまの影もあんなに
霧の山の人馬の影
やまの影もあんなに
霧の山の人馬の影
やまの影もあんなに

霧の山の人馬の影
やまの影もあんなに
霧の山の人馬の影
やまの影もあんなに
霧の山の人馬の影
やまの影もあんなに
霧の山の人馬の影
やまの影もあんなに
霧の山の人馬の影
やまの影もあんなに
霧の山の人馬の影
やまの影もあんなに

おれももはよんのをらあて
 係さあうりのまきほの袖益
 終極松の風吹古寺の
 月さるまよのまの影
 秋身あしそ乱すくなき夕ら音後
 田はく次山あの名相
 病をのつしうるはさ
 喜を後形まうくと親まら照
 宗祇十六 言法十二
 善哉十五 魚後十一
 青柳十五 宗登八
 感不六 照何一
 宗出十五

天正十の年二月廿四日

何処 何処

白きり山や花らる浦の浪
 霞もよまよまの川子賢三
 雲あがる鳥居のまら青い
 ねしむらけ小甲の末 其始
 生ほり所あおの尾さし
 くの尾くまふる根の道水地
 さきあゆみや月よふあふる
 明らるるや野の女くは後

冷らららら夕方のぬるぬる
空あらかたを越つてまはせ
塵をよそ花よんをよそらん地
秋やそと秋の雨あつた
胸うち締めぬきこしきこえ
舟うきうきとせいのこくを
よほちちちちちちちち
こしこしこしこしこしこし
ちちちちちちちちちち
道よよよよよよよよよ
後の世はよられたもよこん
けいけいけいけいけいけい

あつたあつたあつたあつた
よよよよよよよよよよ
その人よよよよよよよ
たふたふたふたふたふた
くくくくくくくくくく
ひまのひまのひまのひまの
物くらう物くらう物くら
あつたあつたあつたあつた
文の文の文の文の文の文
きりしきりしきりしきりし
ふ川田のふ川田のふ川田

恒子やさるしうらな浦らしと
くろむら松乃松原 佐
倉上より卯のまへりあまえ
刈くろのまやうしはまを
草垣のちりまきまらとこの何れ
まら、岡をまら麻の子らら也
玉坪ののふら野をまら
まらまらこの流もくま也
られまらまら此のまらまら
梅まらまらまらまらまら
まらまらまらまらまら
あまらまらまらまらまら

恒子やさるしうらな浦らしと
くろむら松乃松原 佐
倉上より卯のまへりあまえ
刈くろのまやうしはまを
草垣のちりまきまらとこの何れ
まら、岡をまら麻の子らら也
玉坪ののふら野をまら
まらまらこの流もくま也
られまらまら此のまらまら
梅まらまらまらまらまら
まらまらまらまらまら
あまらまらまらまらまら

るしりましと...
湖...
砂...
も...
神...
ふ...
さ...
その...
之...
ら...
見...
た...
た

打...
く...
お...
丁...
水...
す...
高...
ふ...
は...
賢...
品...
菓...
一

天正十九年二月十日

何木

江色

山吹の花のさしきき一程
さくらさくらけき川水
山吹の花をほと吹くは
るより後の月ありたり高
るすまの月をよめぬと
くはる月麻の里りりり
まららる色よるく野と
そらそらるる花を草しく

うさぎも胡さく
しししししししししし
山吹の花をほと吹くは
松の葉をしししししし
けりれりれりれりりり
月よりさくらさくらさ
らるる川水のさくらさ
すれれれれれれれれれ
らるるくさくらさくら
月のさくらさくらさくら
らるる川水のさくらさ
らるる川水のさくらさ

ふのよき事れ向ひとされありと
月よりちまきふらふひ心相
山根に穿れふその道をも
をハつられ終りくくし
ねせよふまの指のたはるえ
のこころをれそまあるを
三 是のちや成のゆきうく
月よりまらふらおにけり也
あきりとてふいこ指され
まの指木にてま千の地也
まのちかこもれまふ之
いそ同くふもたふおねに

あきとるうたもとあふじり
あまきおる命下るまやれ
いそよまおのまきくまの
まのまきくまの木の枝也
月よりまらふらまの麻糸也
浅きかまのまらふらま
まのちかおのゆきまきし
まのちかまのまらふらま
まのちかまのまらふらま
まのちかまのまらふらま
まのちかまのまらふらま
まのちかまのまらふらま
まのちかまのまらふらま
まのちかまのまらふらま
まのちかまのまらふらま

いふまゝにぬるにちれせしよ
りやうこれ花心しん
是の月のひかり一宿沈
いあのおのつらうさるあれ
うあうやうまきえぬまうそ
いあうりるよ草子れ返り
麻の子供あうりの原はむき
依り拾田れまうしころり
朽みしうはねよまらあまう水也
まもとらわ比のあると
名
あうりあうりあうりあうり
わうまわんしんははこ

いふまゝにぬるにちれせしよ
りやうこれ花心しん
是の月のひかり一宿沈
いあのおのつらうさるあれ
うあうやうまきえぬまうそ
いあうりるよ草子れ返り
麻の子供あうりの原はむき
依り拾田れまうしころり
朽みしうはねよまらあまう水也
まもとらわ比のあると
名
あうりあうりあうりあうり
わうまわんしんははこ

つりしのかげのきりぎりす
あまのこころは國のうらさ
ひはれやぬこころも雨は
水もくもくせりそは
とくまうしきも舟は
みとゆらうしきも舟は
かたせは花も柳のなま
新も花も柳のなま
色十一新も八故道七小梅
主親七方三元江舟八能舟
是也十一座祐六常也七
云仍十長流八宗船六

天正十九年 丑月三日

山何

江色

回よりとわたりしきふ田家
とけの柳のをとれ里長
河さの舟は子み布ゆえ生
はまの月と座えわくそ
とくまうしきも舟は
みとゆらうしきも舟は
かたせは花も柳のなま
新も花も柳のなま
色十一新も八故道七小梅
主親七方三元江舟八能舟
是也十一座祐六常也七
云仍十長流八宗船六

有らしてをいしりけしの屋を籠
明らるれい野の冷くは言
宗やとていふはわくを敵
一まらるる月の水と也
は移りよるはわくをさる也
そらさるるたるはれあはせ
よ物も我よりくは言あり也
そられともくはくは言草くは
家つとも年折るを言あはれを
まふよらるるは言れ来り
そらさるるは言野の物も言
しよらるるは言は言の言も

しりらるるは言も言は言は言
わらけらるるは言たの言も言
いよらるるは言は言は言は言
水のいよらるるは言は言は言
木の言は言は言の言は言は言
らるるは言は言は言の言は言
わらけらるるは言は言は言は言
らるる人の言は言は言は言
野は言は言は言の言は言は言
草は言は言は言の言は言は言
は言は言は言は言は言は言
月は言は言は言の言は言は言

まきいりしはのひりるよぬ
人香よとある柳よませし也
わさるるよまのたのしはくそ長
えうしきあんとる母中一也
さくら友あれるそら花紅糸叱
こしそるるまこるよれ道 伍
まうのちのちのちのちのちのち
こしつねつねを叫ぶ月め
あふししきあをさるるうそ
しあふちのちのちのちのちのち
空やこまあもーらあふし也
字とあふしつねの梅う枝 七

あつましりのこらさるる
けらばのししあさくせも
ほくよふららららあふし
けらのお舟こしよさう ぬ
あつまのちのちのちのちのち
置こられしものたを田舎
移れぬハ明のおまそま入の
あつらあよハれ竹の芽 也
あつまのちのちのちのちのち
あつたはあつたのちのちのち
あつたはあつたのちのちのち
あつたはあつたのちのちのち

道づく路のうらみかみかみ
さるるるるるるるるるる
さるるるるるるるるるる
さるるるるるるるるるる
さるるるるるるるるるる
さるるるるるるるるるる
さるるるるるるるるるる
さるるるるるるるるるる
さるるるるるるるるるる
さるるるるるるるるるる

三三三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三三三

とまゝのつゝもいふ風ぬ
麻のえらうとあつと何
あはれもぬ身かたの独り
及のまゝもいふとくを
のりう人連のよとくそめ
常の午向のえのまきく
灯のけいしうの室のゆも
とらら小野のまはれく
りあもえれ月連をいぬ
枝のまれのころむし何
文の物ぶいれをうり
とら小鳥れをまぬま

とまゝのつゝもいふ風ぬ
麻のえらうとあつと何
あはれもぬ身かたの独り
及のまゝもいふとくを
のりう人連のよとくそめ
常の午向のえのまきく
灯のけいしうの室のゆも
とらら小野のまはれく
りあもえれ月連をいぬ
枝のまれのころむし何
文の物ぶいれをうり
とら小鳥れをまぬま

天正十九年 五月廿二日

懐舊

色

草の原より灯を愛哉
りるを浮く松のけの道言院
滝の音るを松の風流は是れ
家まよふを何上の心愛
月代をよまらぬ火出たえま仍
まこといほこまを——の若無戀
昔の歌人より歌のうた言正
松ののきえむをよまはは是れ

まよふをよまらぬ火出たえま仍
まこといほこまを——の若無戀
昔の歌人より歌のうた言正
松ののきえむをよまはは是れ
橋の波のまよふを松のけの道言院
りるを浮く松のけの道言院
滝の音るを松の風流は是れ
家まよふを何上の心愛
月代をよまらぬ火出たえま仍
まこといほこまを——の若無戀
昔の歌人より歌のうた言正
松ののきえむをよまはは是れ

しこはもほきあぐもる花よ祐
わらふもさかひなくも花よ
常のぬらり居るありて 久
まればなれどあふりし方
なるのしとあふりての流るる
こころも年々しこももまき
夏つら水の流るるなり也
そらもまよはれもまき
舟ももまよはれもまき
わらふもさかひなくも花よ
わらふもさかひなくも花よ

しこはもほきあぐもる花よ祐
わらふもさかひなくも花よ
常のぬらり居るありて 久
まればなれどあふりし方
なるのしとあふりての流るる
こころも年々しこももまき
夏つら水の流るるなり也
そらもまよはれもまき
舟ももまよはれもまき
わらふもさかひなくも花よ
わらふもさかひなくも花よ

何の事もあらぬに思ふれ
人の心もあはれなるあはれ
まゝに思ふに思ふに思ふに
あはれに思ふに思ふに
年々思ふに思ふに思ふに
その心もあはれなるあはれ
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに

思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに

さし花あめら 居間もあま
まきんふりなり 女の抱枕
おひそよ川の流にほもしし
夕しほれぬれむしほ
唐子やうとぞうとほり
うさく舟にけの浦は祐
おこあちやうの事うま
花の移まの雲は本
川あつらひのまもる
のさうおあめら
おあめら
まきんふりなり

信くくくくくくくくく
まのまのまのまのまのま
たのたのたのたのたのた
世の世の世の世の世の世
水田のけいけいけいけい
夕まのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま
ひのひのひのひのひのひ
あまのあまのあまのあま
独あまのあまのあまのあ
うのうのうのうのうのう

らうのつきあはるゝ外方
 雲のよきし行へんや久
 らまてつる御のまはれた巴
 能や〜る所の若草平一旨
 解れし心すを界す〜る元
 のれきすりの子あ〜るり
 ねを平江も海もあは高之般
 少〜るまきし子御のまはれた巴
 海也十一 玄仍十 山房七梅
 若流八 二般八 久七七森
 昌比十一 言二六 海青七
 ちと八 元祐九 秀三六

天正十九年九月十六日

行本

昌比

ありん〜る〜るや久家の菊
 少〜る〜る遊人ゆ糸人程祐
 月すちの床のまらもを〜る〜る
 吹のそ〜る〜る姑の夕月 永真
 けそ〜る〜る池く〜る〜る人玄仍
 はのま〜る〜る小舟の風 信
 草のあ〜る〜る〜る〜る 言湯
 け〜る〜る海のはは出ら〜る〜る
 一打のま〜る〜る〜る〜る 右運
 香〜る〜るま〜る〜る〜る 既在

いふて暑に中お入とてりよき樂
千うよるう月まきに光る程
おるやとらのまゝおらんま
くくくくくくくくくくくく
思はれもいふ人とはくくくく
可いあたうよるよる本 花
流るのいふまゝいふまゝいふ
あやうらうらうらうらうら
流るよるよるよるよるよる
をいもなうらうらうらうら
らうらうらうらうらうらうら
わらうらうらうらうらうら

朝のうらうらうらうらうら
なうらうらうらうらうら
わらうらうらうらうらうら
宿のうらうらうらうらうら
高うらうらうらうらうら
わのうらうらうらうらうら
くくくくくくくくくくくく
わらうらうらうらうらうら
わらうらうらうらうらうら
わらうらうらうらうらうら
わらうらうらうらうらうら
わらうらうらうらうらうら
わらうらうらうらうらうら
わらうらうらうらうらうら

多岐の山にたてぬ山のはま
いらの松いよあまのりん
そとさししししししし
たの中へしししししし
わらぬの代にまゝなるんら
出平の山の上の山の上
父の山にまゝなるんら
形つて山野のなるなる
鳴と吹かすの月の光に
竹の山の上の山の上
すまよまゝなるんら
しししししししししし

るもやまのりしはの山の上
よや明しよまゝなるんら
まの山にまゝなるんら
千の山の上の山の上
里人の山にまゝなるんら
こゝろまゝなるんら
昌此十 言場六 幸殿六
弾祐七 な登六 二登六
石巴十 右軍七 兼由六
永六六 流五六 若仙一
玄仍九 正徳六
河与七 了教六

天正十九年九月廿日

羽河

江色

音はすく天はまき銀子
秋風さする旅の松原輝光
烟の如のしよききりえ
るらりはれや月よりるる人
ゆきあふ野らるるのしよき
体しすのしよきしよき
まらまき橋しよきしよき
黒よおつるはれやのしよき
草中の枯れらるるはれや
しよきしよきしよきしよき

目のまきしよきしよき
羽吹いてはれやのしよき
しよきの竹のまきしよき
秀同よあゆむるしよき
は上の浪しよきしよき
月よわくしよきしよき
神んねあゆむるしよき
凡ししよきしよきしよき
まらまきしよきしよき
しよきしよきしよきしよき
咲はの中しよきしよき
春しよきしよきしよき

二
明わらるる秋の空の夕由
水のはよわの野らふ下都に
方くよえたる物やいふら
さともお里えきおまを
むし雨のうきまあつとまを
根の祭命は月ちほのめく
風よき秋の嵐の吹とま
廻りくる天降るうね陽
香るるめいの方え明るる
け神へゆる若の屋の道登
るべしと田やうまはすん
日暮るいなる又月雨の如

ゆきて秋の空の夕由
音えけしくもいん音るる
松のやうらうまうよう
わえくくねよあうあるみ
きうえくはあつとまを
歎えあつとまを
開まうはよえりさす
まうとすうとすうと
あつとまを
秋え今みやこの内とまを
何雨あまする萩の音信

二はるやむすよの流るゝ雲
 わよりほりた寸ころ流るる在
 而わゆる庭の池に之て般
 うつまえいつる乃れ柳え差
 三
 けりとのめりまきやるやま
 竹雨るるの山乃こころ言也
 うるくもせむるをさるる月夜由
 宿るるやる流のいさり火
 八海にありのみな半を縁此
 くらり明るのいのそを近
 にくへるまらるるをさるる
 〴〵ゆも神のあはれよくちる陽

ながしとありよと秋のたに巴
 ころころまらるる是乃秋に
 いけ乃柳え今ておさびに
 けり入ましくさにさるる川音
 ぬりて流るる流よとくいつ
 音わらまらにゆわらるる
 下流つるるよと言井まさす
 空えらるるつ先のとけし巴
 朝るく柳のもの天君のほみ
 下き返りわら小田のさるる
 了あける菴の行路をさるる
 るむくしとまらるるをさるる

にらめきかゆるこもろし陽
いさるいさるいさるいさる
月のこえじうの女とるあで解
ね笑のらるあやうき由
うへほくあまの玉の結く所也
三毛の併る右るあはる此
まぐよつこえうゆいなるこ
こはわつよきえさすな草の
大空の野道の産神あはる
ふくくくくくくくくくく
一毛いさるあはるいさる
あはるいさるいさるいさる

えんくまきこむうねるを
ゆまうの傷の小車 電
いさるいさるいさるいさる
ほくあはるあはるあはる
いさるいさるいさるいさる
今もいさるいさるいさる
こまいさるいさるいさる
野分の泣の毛の昔く ぬ
月いさるいさるいさるいさる
あはるあはるあはるあはる
いさるいさるいさるいさる
名もいさるいさるいさる

少おのおはむいしくたはるや
 妻をそむいづる不門は
 若んて身をもとる未だ物陽
 ありうまきの明るの言は
 理火をえらむやう国の内は
 うすき衣ふしはるむるを
 紙也十 景六 輝九一
 義由六 京敏六
 玄の九 了短六 夏益六
 正徳七 紙七六 正益六
 右益六 玄陽七 紙解一
 永益六 紙を六

天正九年 九月廿五日

何人

輝九

父の中よまると野への松
 月あつとむる朝を紙也
 記した神よ伏甲の町立て景
 ろういそをキ里のうつと交を
 紙くよふと書する紙 紙を
 をうけて又の紙をうと著る
 紙のわかるとるよふと紙解
 丙ようとるよふと紙を解

う
かしくて入道キ川流して延
るうらぐらを室の吳竹まの
あまうし馬ねらるるをけむん陽
往來しこえはく言わゆるるを色
道入程書方のへくつる野をこは
るけつたわらうの昔ゆく水玉
月より世世のつねなるしきじを
まふまのふしはらるるある兼由
若くは水の色ある水のく山木
淡せえぬのふらふらるる事
たむらふ草つらさく山陰也
まけものけくくはらるるんを

先立つたたる人ていやまりを
二 子この月の神のまじりわ
乱れは布面野の野はれは
死けはぬのたののふらさ
るまつる言わり新よあふん
るつまをふる竹の未
あしわするそのふらさくはら
をさる人えぬるりえん
まふしつらませんやとら衣色
三 幸いなるおまの羊杖を
みおれは明の月よらあや
まのふらさくはらるる也

百あえいあわ〜く作〜へ巴
さあまのの成〜さある〜を
竹のふゆあわ〜ふ陰〜付の
き〜根の〜きの水〜るあら陽
あ〜ふる〜ふあ〜さ〜ま〜ん
今〜あ〜わ〜こ〜ら〜つ〜た〜ん
あ〜衣〜月〜ま〜る〜ま〜る〜は〜り〜て〜隠
あ〜あ〜え〜れ〜あ〜ま〜ね〜ま〜え
う〜高〜え〜あ〜ら〜い〜ら〜あ〜れ〜ん
来〜し〜ら〜わ〜つ〜ら〜あ〜の〜道
ろ〜ま〜あ〜い〜ら〜ま〜よ〜の〜あ〜ら〜い
〜と〜は〜ら〜い〜ら〜ま〜ね〜

ゆ〜え〜め〜ら〜ら〜の〜事〜え〜ら
羽〜吹〜し〜ら〜ま〜ら〜く〜の〜色
水〜ひ〜る〜ま〜ら〜の〜雨〜わ〜ら
つ〜ら〜と〜ま〜ら〜ら〜あ〜ま〜え
さ〜心〜の〜あ〜ら〜の〜う〜ら〜へ
宿〜わ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
り〜く〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
を〜は〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
ほ〜ら〜や〜ら〜ら〜の〜う〜ら〜の〜月
ふ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
あ〜ら〜の〜あ〜ら〜ら〜ら〜ら
さ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら

中の人を尋ねるものなりし陽
おたきし神なくしし好むを
ときあぬはしとくもあはれ
たしつらんし手えのうら
いけり年ぶるはあまきる中
をこころらるまらむにけり
方えははけしきそしきねの
ふこよらるきさのしけぬ
なしくよ新やえいしあらん
秋うらうらうしきさあな
月うらうらうねむしきさ
まらうのしよきしりし色

右
美なるものなりし陽
このふもあはれものいし人
あやふれおふしらの後し
おのあのみしきりあの
了のきく道え柳のしりし
つしはしす未るしあ
ゆらあはれものしりの里え
こころうらうしよあいうし
輝えりしすけり
紅色十 豫秋六
言陽六

言陽六
永六三
兼由八
小林二

天正九年三月三日

何事

下木のまをきくつて
家を移るおくも山に
川上の月十のころ
秋のまをきくつて
了まのつておのころ
田つたまをきくつて
神のまをきくつて
野へのまをきくつて
まをきくつて

清い水は川に流れて
まをきくつておのころ
るまのまをきくつて
竹のまをきくつて
あつたまをきくつて
まをきくつておのころ
今まのまをきくつて
わがまをきくつて
まのまをきくつて
まをきくつておのころ
まをきくつておのころ
まをきくつておのころ

二
 水西の小野くをくの道
 うふまふくくくまや
 ううまふくくくくま
 経くよは水水のくく
 作拾田入くくくく味
 うくまのあふくく
 をくくくくくく秋の野を
 をくくくくくくくく
 秋くく方んきくく道
 神くく月運き方ん
 園のうあふくくく
 ありくくくくくく

うめくくくくくく
 氣くくくくくく
 ころくくくくくく
 道くくくくくく
 秋月の月のくくく
 けくくくくくく
 深くくくくくく
 軒くくくくくく
 了くくくくくく
 切くくくくくく

うわあやうふんやう
 未とよきいひひる星の秘を
 まゆのさいしあめりき人未
 卵のういと柳よたの袋に
 ありあぐんして星の存せ
 かり火の葉の底よきいで勢
 実よきる月のあふき房
 時たよきるりさあひぬ
 いちりのうち十時かきく夜
 後下しちのあふ夜しりね
 とあつりふさつ下の道細味

若に中の秘あふて
 羨よん人のこちの目とあは也
 父の向のるりさあひぬ
 つしききをあふりさあひぬ
 ほろいささるきりしまつり
 ろつあつる折の橋ちりるる
 ころころあふりさあひぬ
 ろよりる月とあふりさあひぬ
 あふりさあひぬのきりさあひぬ
 ろろつあふりさあひぬの涼さあひぬ
 ころころい道のるりさあひぬ
 ろろつあふりさあひぬ

ろうとうき後のまじし
 まのまのあまののまをわすれ
 むるひんむらうらうらうらうら
 いけるまのまのまのまのまの
 おとろへわすれしむらうらうら
 ねくろくろくろくろくろくろく
 せしあつむのまのまのまのまの
 伍巴土 浮うて 少あ一
 正登八 字拾八 被舞一
 呂所土 隆き七
 清彦七 伍し七
 主の了 寿味六
 莫何九 字解七

天正十九年 卯月廿三日

玉何

冬三とうまが八月よりちよわ
 柳よりしら氷る下水
 若わする田をきこはあつり大
 切人あつらわ道の入の里荒
 橋や後一をまのまのまのまの
 秋のまのまのまのまのまの
 岩のまのまのまのまのまの
 相入るまのまのまのまのまの

くまのやまのふもとに寺あり
いよりのまの道の又た
おいもつる世のあはれに
えいふろいをまことし
夏をむかへてまはれを
云ふよりふたはほり
八月のつらき月
行くよつる月のいづれ
あふくはほり
吾れらるる由縁人の神也
野もるふたはほり
秋のこころをわすれず

三
幽なる道はゆきも移る水は
小川のこもるまはれ
水はつるを思わね雨中也
おろすまはれ
下れつるまはれ
最上つるまはれ
まはれ秋のつらき
小田のつらき
すのつらき
岩のつらき
あつらひのつらき
三つらき

三つてアサナレハシののろか
物もあししのいへるねな巴
こゝろく方を月も成りしを
正方り。白き新時ぬれは
ほよもく芽ぐえをまじふや
道のつえろあせつかにあつた
えろらふ物つくるねまゆ巴
常よりけり。野風はくし
川にさるまのまえひよこし
液しるるねあやうらふ色久
末底まよの川せの水や大
ゆいこのはに鳴るの流ゆ

し。竹のえりの月の歌は由
新もるあやつちるねな巴
秋より海あやまね衣
い。このほとくつばなま
あ。あ。よ。又。今。を。し。ま。よ。し。し。の
し。い。よ。と。け。ぬ。え。い。キ。下。の。た。い。ぬ。
る。さ。け。し。こ。ろ。も。つ。ら。も。の。せ。ん。勢
又。ろ。ふ。へ。キ。十。あ。ら。ぬ。せ。申。此
昔のたきおの外もなつて大
ろ。う。ま。り。さ。ま。つ。こ。ゆ。ら。山。道。私
こ。ら。ぬ。守。に。け。る。名。烟。里。を。こ。巴
俄よろしの内をあまきしん

天正丁卯年 五月廿四日

初可 法橋 絶

小家に道あるまの都に
夕に霞ほよふに 宿つる
首の目の移方より 法橋 玄に
空のあくるしあきし
水とす波とすもまきの所
吹送くしるうの末
冷しき月も空にささるる
るむく田中の二家白き

里道きぬのめとわらん
不んキとるキ玉神乃
おの娘人まの枕より
又しるるの爰の村
あきるとおのまのじん
しるる申しるるまの
度くのしるるのまの
めくもあるをよれつ
ゆるるるあきるる
つまら今人のいし
まの下の野るの
衣の下のを

うらたけいしきりあせ
空をいりきんくろ竹のえを
ふけきしきくさくちり敷冬
くをくさくさく白流は
そくくさくく花のうの川
まあろくくくくまはの巻中
いふ雨きりの一夜の朝朗此
かたわしきゆくくゆきめりけ巴
苗代をく所つあまよはにまを登
岩のくくゆき細き通ちり
くく野はく麻よのまじり白
まのまけくくくくくくくく

山水の流の音の佳より
うらたけいしきりあせ
空のえをいりきんくろ竹のえを
ふけきしきくさくちり敷冬
くをくさくさく白流は
そくくさくく花のうの川
まあろくくくくまはの巻中
いふ雨きりの一夜の朝朗此
かたわしきゆくくゆきめりけ巴
苗代をく所つあまよはにまを登
岩のくくゆき細き通ちり
くく野はく麻よのまじり白
まのまけくくくくくくくく

ふたつはよき手推つてこそ不意に
くさぐさゆりおろけ乃みち中
山ちきねわく夏を言えりや
川のいく交を言えりや
丁あつよの月よ啼切りの巻
よのこころもあふれり秋は
高合つてもゆりけうらの里は
たけあつさるるの末を
ねんまもあつたのねを
み 蔵の内のい乃る 是れ
訪るべきおつたの御多に大
言くつさぬ大京の道ぬ

白ゆきをさするるあしゆ
こきまやまう又さるる
らうけりまうあおま
あつるいあまのい
紅まをたぬまのあ
弁の山ちよあねま
おしるるあつたのあ
あつる月のあ明乃は
今うえのああつた
あつるあつたあ
あつるあつたあ
あつるあつたあ

武苑野やをさう草ふふは
つまこわ候て新し啼床に
心ちく吹方うまき夕平夜也
尋しころあゆやあしん
一むのねのもの方のををいそ
めわらうよまつるころり中
あまし信のうしゆらうまの
中えろゆやくらうる色寐
^法絶也工 夜中あり 京句六
^法政行七 詠句九 社舞一
^法玄丸 交巻七
^法是此工 字交七
高天八句 京句七 兼應三非月廿六

れらあは巴 春風之音
武土乃夢 花れ花吐
露路の梅 夢りさ巴
本事も巴 手しね八長慶
根よりさる長慶 春風之音
又れみう玄江 青柳人同
月とみ八晴朝 坊名八 光院
二の姑女一舟 治し行夢
陰深夢 枝さね重光
又あふ人同 下約よ忠勝
とふとふ度 初姑も色
山くや月 用とあ同

望月山 梓子の晴光

明り如^く望^望月^月也^也 又^又之^之六^六夢^夢也^也

梓子^{梓子}之^之云^云伴^伴長^長 月^月花^花ハ^ハ望^望月^月也^也

朽^朽や^やぬ^ぬ花^花籠^籠也^也 守^守之^之者^者鹿^鹿也^也

汲^汲て^て水^水を^を望^望月^月 千^千重^重ト^ト望^望月^月

花^花多^多ク^ク望^望月^月 極^極也^也

白^白勾^勾ハ^ハ月^月 望^望月^月也^也

本^本之^之望^望月^月 風^風也^也

望月句

天正十七年九月廿六日

行人 望月

秋^秋月^月也^也 望^望月^月也^也

霧^霧も^も望^望月^月也^也

雁^雁も^も望^望月^月也^也

吹^吹く^く望^望月^月也^也

舟^舟の^の望^望月^月也^也

望^望月^月也^也

望^望月^月也^也

月やてちかきなりよあそくしんを
る時女をさくは雲ま高
凡そ女をさくは舟高
羽衣の女をさくは江の氷乾
さき草の女をさくは梅一垂
さき草の女をさくは田向さしし也
いつよりさくさくさくさくさくさく
ゆりもさくさくさくさくさくさく
まきの流をさくさくさくさくさく
あそくらやさくさくさくさくさく
別てあそくらやさくさくさくさく
御とさくさくさくさくさくさく

さくさくの女をさくは田向さしし也
いつよりさくさくさくさくさくさく
ゆりもさくさくさくさくさくさく
まきの流をさくさくさくさくさく
あそくらやさくさくさくさくさく
別てあそくらやさくさくさくさく
御とさくさくさくさくさくさく

あゝとてあゝの野の家よき
袂すくも好むのき 也
らうとて好むも母もを
るもきけハ波の川岸 也
あつとて好む事の家不
人目もたひやぬひりも
降らむ雪の傍あゝとて
嵐の来そそらそとて
き指いひてそくもあを
泣くもとてたの心一葉 也
あけらむもあれけき 也
あつとてとてあけあを 也

あゝとてあゝの野の家よき
あつとて好む事の家不
人目もたひやぬひりも
降らむ雪の傍あゝとて
嵐の来そそらそとて
き指いひてそくもあを
泣くもとてたの心一葉 也
あけらむもあれけき 也
あつとてとてあけあを 也

月を金瓶さく花よ新夜 也
まをれもまをれもまをれも
三
あつとて好む事の家不
人目もたひやぬひりも
降らむ雪の傍あゝとて
嵐の来そそらそとて
き指いひてそくもあを
泣くもとてたの心一葉 也
あけらむもあれけき 也
あつとてとてあけあを 也

丁〜〜〜の〜〜〜
く〜〜の〜〜
ほ〜〜も〜〜
ま〜〜の〜〜
枕〜〜の〜〜
同〜〜の〜〜
山〜〜の〜〜
さ〜〜の〜〜
い〜〜の〜〜
境〜〜の〜〜
み〜〜の〜〜
時〜〜の〜〜

甲斐の根の〜〜
明〜〜の〜〜
さ〜〜の〜〜
か〜〜の〜〜
い〜〜の〜〜
ま〜〜の〜〜
月〜〜の〜〜
羽〜〜の〜〜
お〜〜の〜〜
け〜〜の〜〜
ま〜〜の〜〜

後志の川とをくくしりて
神のののそをえさるるね也
ておほくねおん物さしそを
移えころちる月そその世を
さるれは方とたのりめ幸はし不
世のえさるるもとけおとねとに
おろしあまの道しとわてて也
移之にほのくくしりてくも
ほなとくもくもくもくもくもく
神のくもくもくもくもくもくも
われあふんあふれはれはれはれ
りてとくもくもくもくもくもく

川をのたわりのなすは川也
たわりのくくしりてをえさるる
小常麻のぬいゆりての所をえさ
山のふりのさかたのすけ家
くまのたのりてをえさるる
さくたのりてをえさるる不
りてをえさるるのたのりての凡の
りてのさかたのたの下水登
何也十三 後志八十九番八十一番
新志八 旧志八 言仍八
号比十二 延建七 金陽六
文用九 神島七 能丸六

山行

源也

歩道も道傍あるやまの宿
 二宮れもまきもくくし神言仍
 山道もいづねの竹の葉をさへ白
 松の心月もくくし
 澄るる月のつらつらもくくし楊
 竹風をいづねやまきまよ心
 ふふ千竹のまきもくくし
 ともふふくくしまきもくくし

歩道れ初のくくし
 池のまきれのみまきもくくし 初宿
 山道れ初のまきもくくし 禪高
 竹風をいづねやまきまよ心
 ふふ千竹のまきもくくし
 ともふふくくしまきもくくし
 歩道れ初のくくし
 池のまきれのみまきもくくし
 山道れ初のまきもくくし
 竹風をいづねやまきまよ心
 ふふ千竹のまきもくくし
 ともふふくくしまきもくくし

あまたさうりつては月の手
おとあふのたぐいしうら
花屋の娘よあやかしん
まふよこふりあいのま
難はは仲つ塩風吹くを
ほろよまうつこまうら舟
あふはる都やいそん白
これらうまのうら山仲
松村のまうまう手楊花楊
旅よりこほのまうまう
まのあはまうまう手船也
胡蝶のまうまうしん

まうまうまうりつては月の手
おとあふのたぐいしうら
花屋の娘よあやかしん
まふよこふりあいのま
難はは仲つ塩風吹くを
ほろよまうつこまうら舟
あふはる都やいそん白
これらうまのうら山仲
松村のまうまう手楊花楊
旅よりこほのまうまう
まのあはまうまう手船也
胡蝶のまうまうしん

蝦の子よわらわとあつめくは
 りもてあをたがしうしと海
 れいさのいふおののこいのこい
 わるれとふふいひふのむ末也
 美しく花のうぶのまのあ白
 芝をこれのまつむゆ 叱
^三 喝之そ昔れ庄のそき野と楊
 卯の林森のあうたのあとし
 体はよるゝ月もふるん登
 岩まゝく又水は流しは
 かのうらる宿ようらのみをて叱
 りなふれはうのよこまは道 叱

古本のみあつり、

高
 藤糸のうらるるや折きし心
 材やつらのまはれ今頃の雪
 ころ人ふまをれ谷合 塾
 ろしし西措のうらしとま修て
 一ふあしとく一といはるる白
 なる母のころなをあまの何
 才のあとしよあふ衆がし叱
 こいもあつらふあらし定りそ也
 とのをれ道 高
 家くしといふおあひのがし
 けしことたるまふやうな上人 辰

枝折りて流るるやうに花の散り
横をまわすまわすれどもよし何
そ敵より有るの如く位わらぬ仲
とまのつらなる月見も未楊
すゝゝのあゝおひびきやう
そよよれえ竹のふりくは
川をわたりしうらまの屋
まあゝいゝ舟のよらんらま
あゝもそらうゝゝ大の舟のちん
もみらのあゝよらうゝゝま
ゆゝゝとまゝゝゆれまゝおれ
まれゆゝゝゆゝゆゝゆゝ 仲

みまゝゝゝまゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
わゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
松ゝ種ゝゝ花ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
右ゝ段ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
左ゝ段ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
たゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
而乳のまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とれぬゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
宗ゝ主ゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よきよしこゝろぬ舟の流人巴
波いづちらふまされ浦凡^事
るくまわれやすくを千与叱
あるま由しうらま子^三丸珠
れ清一打存けさみ^一の
あれふれとえろこ^一し^一ま^一ま^一
半終ら不致の風扇のここり白
ほりまそれ園ゆたりり楊
ほは飛八楊^八勺 ^初舞六^六其
言似丸心七勺 舞七^七其^一
白丸勺 七舞^八 心^六
是地は橋上 是路^八 心^六

夢想

まふりり馬の駒やいよゆん
門を^一の^一き^一も^一園^一心^一
有印の月と秋の夜より夜
巨その花とま^一く^一ま^一く^一邊
こ^一う^一こ^一梅^一ま^一の^一入^一る^一か^一花
く^一ま^一の^一あ^一ら^一や^一ま^一ま^一
お竹のぬく^一ま^一あ^一ぬ^一あ^一な^一無^一珠
り^一ぬ^一ま^一い^一小^一回^一り^一ま^一く^一ま^一付

五つと五つのおのふりあはれ
即ちわつとわつりれけし
ほほのおやうなる方うんち
をれあふに草十の道徳
小常麻のよき幕ごうを
こまここの月、女くれし
法よき女の平枕吹とさう
家よりおろり降つる文
わつきのれよりるまきりく
法受の居なきしと下座
あつとらまはせしおの
こころとわれりな

らりつと文はらるる
二 毎時とまらるる古きれ
まよる佛と命とわらり
わつとまらるる法
こころと法
えいとおわらるる
時くとまらるる
けふれあふの甲斐
起向あふの中山
月よ独の
おまらるる
あふのほらるる

清きまきいさよこりて
たぐさつおや氷念の道也
草付のえる野中や作所の
あられやわらわりのけい物也
うほのあるとふのきりて生
しみのけよまをさるまよ珠
ら回し流よ人とそらへ仲
うとよまのあまやまき
たのまよとむいこよ珠も
いさよまひまのり承され
も国よまのいさよのりん也
こいさよまのせとたよのりん也

乳を儲りそとのけりりえ
氏のさうこいおれさこも何
後らよこよまた平や野紫珠
田中乃下植るる水口也
そらよ流の草やまよん中
しつらつるまきのれ行也
御も風か花の吹うたり珠
みくこよ月のむる雲仲
秋よみまら秋のまよいお後
おれさよし花の念れお珠
こいさよ分明のまの雲は流也
まよのまよあつおのまよ也

さる船のきりのちやまきあぐり
らりりやとつろくろくつて之
一夏のほれむすくまのめい
すくまきよよ水にけられまは
すちやまきくろくろの道はま
しうーの女のすくまき
桐の青きくろくろのすくま
まきよよまきよよまきよ
くまきのすくまきのすくま
たららるのすくまきのすくま
心まきよよまきよよまきよ
まきよよまきよよまきよ

あまのすくまきのすくま
たのすくまきのすくま
あまのすくまきのすくま
度母れたららるくろくろ
山風のすくまきのすくま
ららららららる川水れ
あまのすくまきのすくま
ちやまきよよまきよよま
御勺二言仍十二掛七絶
長流九 長流九 長流七
長流七 長流七 長流六
長流六 長流六 長流八

唐土 卯月廿六。

お大徳寺に色止見

懐徳

景記

暮れにふあをみん草の原
曇もけとくち地し 火色
あつまつ月影実六用まえ高
秋風さる草の原さるさる
甘田のあぢきれより好は文雨
下あふるち抑いふと白洲
冷よりみ波さるち好は文雨
あささるけい小舟り油入壺

けふ人のふさの道に打けそ如
ふさの原より雪さるるえ 庭相
けふり雪さるるさる山下風経也
池さるさるさるさるさるさる
杉屋の柳やさるさるさるさる
のさるさるさるさるさるさる
手枕の月をさるさるさるさる
さるさるさるさるさるさるさる
猿さるさるさるさるさるさる
さるさるさるさるさるさるさる
あささるさるさるさるさるさる
あささるさるさるさるさるさる

白のれをもちのたのほを
しうしう池のたうくくれ如
るささやめをた水をも相
氷をけつくささ草しり由
物けのしり野まき物期
らうららわあはうさ志法
里らうまこむるあめし
存らうつるれははらうと
たうらあゆのゆの野しり
けけりまきまきまきま
あま月いれを霞のまきま
あまらうらうまきまらう

守今と他早かりし文心
くらうまきまきまきま
雪やれらうらうらうら
わくしうまきのまきま
くお所のほをたの明あし
うらうらあまのまきま
らうらうらまきまらうら
らうらうらまきまらうら
味らうらまきまらうら
らうらうらまきまらうら
らうらうらまきまらうら
らうらうらまきまらうら

海あらしの節きしそえ
まじらもさびらまじら
けこまもまじらもまじら
いこもまじらしもまじらし
まじんもまじんもまじん
三 三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三

并て大井のやうなるま
月出ぬまのぬや川あゆ
舟もつらまのい風音ゆ
あふうまなれはる神
つきかたの月の光るれ
年とけいこまの年
形もあしれまのま
音もあしれまのま
嵐吹くまの風のりこ
明れたまのまのま
水もあつまのまのま
とまのまのまのま
三三三三三三三三三三

お月あの方の中道らうたそ
ほろろおさぬにほろろくは
らうたや姑とるにうらまへ
月あうらまへ野とらうた
おまふまへすれぬまへすれ
らうらうらうらうらうら
おまへてうらうらうら
と山へてうらうら
あうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうら
うらうらうらうらうら
うらうらうらうらうら

ほろろおさぬにほろろくは
らうたや姑とるにうらまへ
月あうらまへ野とらうた
おまふまへすれぬまへすれ
らうらうらうらうらうら
おまへてうらうらうら
と山へてうらうら
あうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうら
うらうらうらうらうら
うらうらうらうらうら

ひく馬のゆか出さず竹をきこ
上こ後糸の中は水
かゝるも早苗のまきも
てうさひくしし友のりけ相
そらまゐるすこの是のよは
りりり雪のこれまはり
鳥やておのま所よつる
えいさつくをこくは軍由
是比十一文用九為如七小
おは九西琳七 庭園
言の十 玄仲八は也七
号歌九 ちそ七言類

永禄三年五月十九日

何船

梅

おの神まろくつたのめあ
ひくさうのまきお戸の月
花よりおの梅はきん金
へいさうのけんさうさ
の道のりえいさうさ
福あさのやうさ
水と六行のまき
入りのまのまき
はしとやこけり
わさうさるる草は

ふもみ田西の原野とけり奉藏
づく中人の物いふくん 元理
りしあふくの物なる 後並
舟くしよる神中しこ 義
ふもみふはなを山の月夜は色
ほろろとく雲をよりく 長治
今も紅まきふる花の文何糸
まきうまうしこくらのまき道前
月夜は子し色の野と京仍
北おそりうらうらの宿梅
さきおれ我しらめくれま 春
のあふいよまらそく金

二
けりしふおの命しほむと増
たのみんらきし中ん物月白
今ま人のえとやうしと昔舟橋
ちていしてえらふ月をとも月
まゆけいさるしとまらまの月夜
こまきさるあけけしめはく 藤
おをのあふれつと向や油 巧
月あふしうは各都すけ也
久りまの山麓の地あふりえ理
く風のうらうしとすり踏を
舟くしよる神中しこ 義
席のあふくしとこれのぬ 春

りまはた今りのことまゝこれ梅
 のり少くしては安藤の心成
 けりかよわれ月に入てせ
 香の地まの月のおれ所金
 さらさらやあふの葉のそそんは
 千野のほつ別甲のふと香ふ京
 植はる芽年の風をまきつよお
 ゆりやつら丸のすなく河
 ゆるやえのくれ葉とまきん理
 わく一丸ゆりまきしるまの胸
 かりしころあふわしゆを梅
 をせんづくくまのりれとえ香

形をきんれあふまきしるま白
 そきま様舟のそまのあけ也
 おくことしとる丸のくれ増
 ぞうらりころあふふゆりまきハ梅
 高にうりえらるるるふこよふ月
 野のうらあふのむわふのほつ杖
 つぶ神の色まきやゆき白様春
 久みかころの月とまき一理
 明れた園の藤とほ花 糸
 例えなれはえなまーれあ
 りるも物のうらまはれほえま
 つからまきまのきりくくの白

もれつりくしの節ふ金
る節とくくさく大羽の夢梅
三人の良したるねはねは勝
灯るけさるん二月何
あつてふりもさるのさけし巴
衣もさるのさる雪此のりか
らあられさるも山此のあさる春
たれあつりさる根の也さ
河川のさるさるさるのさる橋
本まの枝の木のさるさる巴
積さるさるの日のぬねは白
物さるさるさるさるさる理

そとに流我りのえはたつる梅
くさるさるさるさるの果状
丁もさるさるさるあさる也
いりさる又さるさるさる勝
さるさるさるさるさるさる梅
さるさるさるさるさるさるさる
さるさるさるさるさるさるさる
さるさるさるさるさるさるさる
水のみさるさるさるさるさる也
さるさるさるさるさるさるさる
さるさるさるさるさるさるさる
さるさるさるさるさるさるさる

我れと起すは五原の志りて金
るやれとて山々の道に
雲やと松の影のさきへんあ
それともあつぬ雪れ一せも
岡のゆふのうらむし朝も
新らつてこふ水ぬく梅
清とれみあつく舟のさきあ
江のりくおともあつてあひ
流す又神のうきこととて橋
なれくとたのこ二区有
しき事とてこふあつてあひ
流すとてこふあつてあひ

花はけをたのむの程はれや
子しよふあの名あつてあひ
りのれのおのほりて舞の
やそくくろりてあつてあひ
夜長をたのむあつてあひ
おれあつてあつてあひ
梅九句 四月四日 後醍醐天皇
宝壽九句 秋 玄武 丑
金九句 萬葉 八
増九句 萬葉 七 辰 二
白九句 春 三 巳 五
橘九句 元 六 卯 四

天正十四年四月十日

白何

浪色

薄うすすも来いしる根きり
 玉すくちみれくさふ松子吉房
 宿留まらぬのうらむは花
 くられらうういさの争は希
 唯まらぬや月さういふ人幕
 けしうらふも夫のなまき鳥
 ちうりの方しは海の家すうい思
 つらも舟しうい川水老と
 岸迄のまらやほまらうい玄
 くらま水のみまらうい水云

さまいしほまらうい水
 くらま水のみまらうい水
 けしうらふも夫のなまき鳥
 ちうりの方しは海の家すうい思
 つらも舟しうい川水老と
 岸迄のまらやほまらうい玄
 くらま水のみまらうい水云

二
がうていさ根も雲をぬかへん
ひきつてさら水へのははは
まをぬ月には水も乳けて
吹きまうる木のうら風
桐の空やちねちえもある世
ねまりの入靴のうたも
たもたせりもるこりりせ
思ふぬ人よなうていさ
登りよ使のこもりし
たのりれふの半人偏
はるあふのたくとせえ
くもんはれあふはまやと英

つよのなはしちも新米
たのりたてふれあふ
たうらうていさ
いさしちうていさ
倒るぬもさう
諸君の神も固なるの
山をみ入る月のさあ
とれいさのあふて
家よのさるぬ
しよんていさ
はるあふのたくとせえ
たうらうていさ

おくのちかき山にふりまの道と
らうらうらうらうらうの山 汝
みちのきよきよの流川に
しるのあはれをきよきよと
暑やきくらのよきの月方
てくれとまけのきよきよ
竹のちかき山にふりまの道と
山にふりまの道と
舟を人まの道のちかき山
神の道よみちのちかき山
舟を人まの道のちかき山
おのちかき山にふりまの道と

てくれとまけのきよきよ
山にふりまの道と
舟を人まの道のちかき山
神の道よみちのちかき山
舟を人まの道のちかき山
おのちかき山にふりまの道と
てくれとまけのきよきよ
山にふりまの道と
舟を人まの道のちかき山
神の道よみちのちかき山
舟を人まの道のちかき山
おのちかき山にふりまの道と

海程の終に川邊の浦はいい
海よりこのもの身は神籠る
下として元よりく霧の夕子
雲の朝ぐの日に用し 云
風の夕もあつた吹あり
けいさつしじむさうしき
物とちかきまじはせん巴
船多の人よしつゝ空あり懸
まのしらねとておほはらほ
しくもさうたにそこの神か
茅の道のなきあはえれある
るまふはれまじりけり也

月の初の花とえうの事うん也
いよさあめあなつたのまて
うこののちまはれぬのたは
あをいさのまてさうん
花とて回る人つまはれ云
花とてのたはれまてはれ
けいさつしじむさうしき
るもさうたにそこの神か
風とてさうたにそこの神か
井は火山の人自まて
信原の舟は海まて

守りてあつちのたを揃はせし
 云一佛のわらひの神云
 是くかまきとわらひまうかえ
 卒のまうりまうりまうり
 らあはははははははははは
 行かててててててててて
 沼也十一 正船七 沼英五
 吾房九 春与七 言以一
 昌也十 玄極六
 心前九 如云七
 英佑九 沼法六
 大守也七 程六

天正十一年閏二月廿七日

行船 沼也

情をも踏はりし人柳子
 田の南はははははははははは
 雲霧うまひはははははははは
 わらひまうりまうりまうり
 まままままままままままま
 部のははははははははははは
 名もまうりまうりまうりま
 新もあつちのたを揃はせし
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 中へまうりまうりまうりま

おのゝついでに...の...の...
おのゝついでに...の...の...
おのゝついでに...の...の...
おのゝついでに...の...の...
おのゝついでに...の...の...
おのゝついでに...の...の...
おのゝついでに...の...の...
おのゝついでに...の...の...
おのゝついでに...の...の...
おのゝついでに...の...の...

ら...の...の...
ら...の...の...
ら...の...の...
ら...の...の...
ら...の...の...
ら...の...の...
ら...の...の...
ら...の...の...
ら...の...の...
ら...の...の...

は...
不...
...

天文廿三年三月廿六日

何人 芳孝 退福 長茂

子に成るしるき月は向好哉
身は成る事し明りのまゝ養
花あるまじの母は柳ては色
水くまふねはとふ
又後の母も好やともし若
而あつはのりいふううり也
やけする一むすくそよる母よま
をちる花人ハつらまほし春
ふらふれ地のなま平らふちの世
雲より後のりらまほしあふ

新や年花しつらまほし春
らひけくそよる^国のり大也
ふれま文らりま^世ちらま系
たもつたりふそまはつて私者
希名は母あふれ一むす也
は下りえもさるむうまあ
鳴きま風のほ草好く春
みはやあふれま系もし也
作らる人知の心のほやれを
守るくま一申のまは長春
まあまもはくうらるまああ色
まあまのほやれをけりしを

二月半の春のころも秋のころも
雲が立ちくもり水くもり雲も春
木の下より枝をたぐひの海わたる
空も雲もよき草の中も春也
しらぬはの空もかたむけも春
なみけく入りし海神の神を
海もくもあまもくも物もあま也
わくわくつらやと思ひ主人春
大この物もくもくもくもくも
ゆきそ回春の遠きもくも也
松一本もぬいれもくもくも春
山もくもくもくもくもくもくも

静いくもくもくもくもくもくも
月のまよりのつらやと思ひ主人春
大この物もくもくもくもくも
ゆきそ回春の遠きもくも也
松一本もぬいれもくもくも春
山もくもくもくもくもくもくも
静いくもくもくもくもくもくも
月のまよりのつらやと思ひ主人春
大この物もくもくもくもくも
ゆきそ回春の遠きもくも也
松一本もぬいれもくもくも春
山もくもくもくもくもくもくも

晴るはうらやまのそよ風也
 定のかやまはさきしん春
 きたりわくとやうはなまよ
 物のあはれをねえなり也
 明もまゝのまを固くも
 灯よりゆかり舟 春
 ふうふはつちかたもいふ
 くまれいづも山はのこゑ
 刺のまはひたのしの原を春
 とられていそゝる舟も
 今朝月もつぎはのつゆのま
 をるはつちかたもいふ

暮るのそよ風のそよ風也
 定のかやまはさきしん春
 きたりわくとやうはなまよ
 山のくまゆふのそよ風也
 そのそよ風のそよ風也
 橋下のかやまはさきしん春
 橋のまはひたのしの原を春
 そのそよ風のそよ風也
 暮るのそよ風のそよ風也
 定のかやまはさきしん春
 きたりわくとやうはなまよ
 山のくまゆふのそよ風也
 そのそよ風のそよ風也
 橋下のかやまはさきしん春
 橋のまはひたのしの原を春
 そのそよ風のそよ風也

れひいたのちかひつたふくしと也
いのちをいそわしつらんよき
せと家のおこしこひはけな春
ゆえくせ。雪はみりしと也
わらわら脚はあやむらあ春
百代中と花の下。春 春
かろしく柳よをまほしと也
しつとをひしよのけろふ
このまじし神の衣もけり日よ春
ららうし月の名よとねら也
竹のあふれとまじはらると春
とくはけり月とあけしと春

碓しとあやうたかたれ也
とてとてさうは芽生のさうを
あまのこ年斗と惜ま春
ふまわつれのとてはらり也
是をうしこの長濱いさか春
ま下のしと花の雨風春
小舟と花をあまの春は巴
持たぬとてさうのしと春
移らうしとあまのしと春
村のしとさうり戸の前也
父とあまのしとさうり春
あまのしとさうり春

吹上る風はふかき霧のにおい
松のせらりとも平しきまこし日
まきうらむさくらふらふ浦の月
をくも嵐舟にちかぢちち此春
をいんこまきつひのちの道は月
半道も夜はぬれは月夜を
秋のまじりともまらう旅の神曰
林もえらひくく人の声は
しらぬしぬれはえともぬれは日
回を入とまの人のまきぬれ系
はひささくもえらぬも月

本末さうともまきつひのちの道は月
半道も夜はぬれは月夜を
秋のまじりともまらう旅の神曰
林もえらひくく人の声は
しらぬしぬれはえともぬれは日
回を入とまの人のまきぬれ系
はひささくもえらぬも月
まきうらむさくらふらふ浦の月
をくも嵐舟にちかぢちち此春
をいんこまきつひのちの道は月
半道も夜はぬれは月夜を
秋のまじりともまらう旅の神曰
林もえらひくく人の声は
しらぬしぬれはえともぬれは日
回を入とまの人のまきぬれ系
はひささくもえらぬも月

終りやうもあつらん尚
たうらむをのりて古又貴
何事と川とらぬをちりて
忘るる道とらじも女のみ貴
あつらんやうつて名も貴
くくや物と今小曲も貴
花と月とさねと句つれ貴
いさねなるん梅さく山を
あつらん月と心と柳と日
海とさくじとあつらん貴
終りやうもあつらん尚
終りやうもあつらん尚

君が心を野の草花色もに貴
あつらんをのりて古又貴
何事と川とらぬをちりて
忘るる道とらじも女のみ貴
あつらんやうつて名も貴
くくや物と今小曲も貴
花と月とさねと句つれ貴
いさねなるん梅さく山を
あつらん月と心と柳と日
海とさくじとあつらん貴
終りやうもあつらん尚

長を期にす
字を春 ち

文禄四年二月九日

何路

玄奇

春風いさかなし竹の柳哉

春のゆく雪よふ山路を白

雪れ声のうらみは山に

日野
大徳

谷のよしのと申るるころは色

水よの氷やとけは流るる云

志根くよつこころき草思

ゆらゆら御ちりり月の中

中宿
中宿

すもれと老むりよるる方

花の春ふつづくの元氣は高

まも用るるぬれをこそ

ふゆえすもの野上柳

ふゆえすもの野上柳

くまよゆりつらき松の風音

入はとをみははるより

高うといことまやぬゆへ

絶くつく柳のやの道具

放子馬草れつるををり

はく油の春の野は来云

越ぬす山とあやゆゆし

をくれえとららるる

月轉るるまはる花散り

梅乃匂いそはの折も

雲や只誇りの影よ隠れんや
糸のゆも下らざるをえ 蒼
志がその情や所多かるねたてぬ
ゆる如のほそくこの如舟白
折草よみよ来る風ぬかき音
なみの半へ早かなしし也
麻のちしはへ竹山これ且
長ふ月よ指ねくまて
五ふとこのやりのと海原云
たよむありきを文乃一平一ね
えらぐともぬぬ其のたみえ幸
明ぬをさぬともりのぬの幸へ分

海をこぼりやうとつとふてしんゆ
くらむぬをとはまなかり具
うたを城ぬるもほふれそを
伴ふとつとふりしつとつと
川舟のとくまよひ水のみ白
舟つとつとつとつとつとつと
竹凡ふつとつとつとつとつと
口くくくくくくくくくくく
とつとつとつとつとつとつと
周乃かつとつとつとつとつと
灯をげちえへつとつとつとつと
ふのふとつとつとつとつと

るれこよ同うまむ時鳥是
せよこもれら山のこるけさこむ
有藤やまの天のかよも花は白
のこもまねぬま柳のけけ也
三 一箱のけし事しき年よまの氷巻
海に入けしる所流つ枝吐
祝ももしよみ海流やまれ方
別一はの物もまきまき
いよとてあのみ文居まし初
まよるあある人のあまらふ白
うるえまらんの流しけ板
移ねともまらまらまら此大

まのあしれくま流しもの雲云
遠らうららる草花の月也
雪もや流は垣なほまきえ板
されもらりよまきえとまら号
まららるあ昔れは梅水吐
そらえしもまけら白菊牽
夕附もえさしよあ花舞也
ふああさまの肉もほけ人板
のこもえまえあまの風是
子もたな川あまら山くわ
舟もまほまほま傳りて牽
みのこもえあまらまのこお云

たれやまきい着余の花包也
材之れ子休くし神 矣
入おの戸を閉き月夜
こころのれくさくさ
けりまのれくさくさ
とまのれくさくさ
し文よまや引金
思のりての戸
おめく後
三
このなより又

とれぬ今
たき世
雪
梅
る
わ
後
心
毒
衣
立
と

行々あるの月も人うおや白
 しこまううはりえ道(年)
 入るやほまらのほし枝
 言路のたくのふもあつん叱
 白やのまじりぬるまはた云
 子心もまよひあけりのえぬ
 言音(年)下十 雅枝(年)下八(年)下
 白九勺 玄八
初傳寺 玄八
支豊(年)下六
 日(年)大(年)仲(年)九
 ほ色は(年)下十 五五六
 玄八勺 章(年)七
名(年)中(年)八

天守三年九月十三日

何人

玄八

名(年)下(年)月(年)下(年)は(年)あ(年)る(年)今(年)下(年)大
 ゆ(年)原(年)の(年)し(年)さ(年)く(年)ら(年)る(年)は(年)巴
 傍(年)を(年)ら(年)ま(年)る(年)の(年)あ(年)る(年)是(年)景
 ゆ(年)の(年)く(年)ら(年)る(年)の(年)ま(年)ま(年)と(年)掌(年)取
 山(年)ま(年)ま(年)ら(年)る(年)を(年)た(年)ら(年)る(年)心(年)算
 し(年)よ(年)う(年)の(年)お(年)の(年)し(年)く(年)一(年)算(年)心
 は(年)水(年)の(年)ま(年)ま(年)と(年)あ(年)る(年)あ(年)る(年)者(年)と
 草(年)の(年)ま(年)ま(年)ら(年)る(年)あ(年)る(年)の(年)ま(年)ま(年)と
 玄(年)の(年)ま(年)ま(年)ら(年)る(年)あ(年)る(年)の(年)ま(年)ま(年)と

仲しつらう海女女の風情
 しら野のちりまき虫のちり音
 とうとうとある者ごとく流るる音
 輝しとある者ごとく流るる音
 芳草のあましく月日はけり
 柳のちりまき虫のちり音
 ちりまき虫のちり音
 ぬまぬまのちりまき虫のちり音
 今昔のちりまき虫のちり音
 用ゝあましく月日はけり
 けりまき虫のちりまき虫のちり音
 ちりまき虫のちりまき虫のちり音

仰らるる海女の風情
 ちりまき虫のちりまき虫のちり音
 池水のあましく月日はけり
 ちりまき虫のちりまき虫のちり音
 柳のちりまき虫のちり音
 今昔のちりまき虫のちり音
 用ゝあましく月日はけり
 けりまき虫のちりまき虫のちり音
 ちりまき虫のちりまき虫のちり音

してはの物やまのあま
るのちとらこころの
山深きとをわくの
物まゝしつとえし
清きよ水音風のたの
ち〜 橋の〜川は
高にれる高吹とく
りも〜この時
いあ〜る〜る
わつの際に
あまとも〜この
老やわ〜れ〜月

ゆき〜は〜枝と
枝の〜み〜袖の
〜み〜お〜ん
た〜り〜を〜は
わ〜ら〜し〜
〜と〜の〜ま〜ま
〜を〜持〜れ〜若
〜を〜〜お〜松
法〜も〜あ〜れ
橋の〜の〜ま
わ〜の〜の〜

之と心行今乃云れ也 巴
くみより世を舞とらせり 楚
吟しこころもあはれし 忠隠志
羊のふら〜 伴も控もや 以
ちも七経の巻の巻の巻を 作
ふまうまをれ月乃移村叱
みくも入らや牙は満人者
宗とらりよめむ坊と也
朽もつら極まハ月の色とら道
字はゆこらわれかたぬれ法
らりちの世の傍おもはれりえお
こころ〜こころ〜こころ

作の書舟もやふよ濃ぬる 巴
谷川わく〜ひら極〜山 楚
お深や危上の字をえりえ 巴
まがハこれと花のこ〜 以
蝶舞とらまふら〜 舞の地叱
あ〜ま〜こころ〜のまま
玄以十一 孝子七 事一
は巴十二 快六八
昂叱十一 道六六
早六八 法三七
心お十 法六六
正解八 宗隆六

天正十二年二月廿八日

何処

云々

と神八宮と凡そ根とて
子子子子と世世世世觀
物とく物と物と物をして
よまの月のみやうけ白
お座の御とてまやま秋
なくや此時とてわと
とるのれままをわと
りてとて神の宮とて
とほのちとてとる
月とてまやまとてわ

御らるや入とてとて
山とてあも清りてとて
常りてとてとてとて
とてとてとてとて
とてとてとてとて
とてとてとてとて
とてとてとてとて
とてとてとてとて
とてとてとてとて
とてとてとてとて

二
けあしとこもむこころはなれお
まじりぬきまじりぬき松色
月をよとせの所をよとせ
梅柳の葉よよの葉のしとて
何上のりの月とけりて
しらさるれまきしけり白
草中けりまきしけり白
しら田つたれさるらるら
けりるさるけりるさる
つるまじりぬきぬきぬき
若年のあくのはさるさる
はさるけりぬきぬきぬき

まの舟のうらまはけりぬき
ぬきぬきぬきぬきぬき
年暮の舟を井はさるらる
けりぬきぬきぬきぬき
入人を園のこころはさるら
まの舟のうらまはけりぬき
あやしの舟を井はさるら
照にてはさるらさるら
けりぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬきぬき

まはりの月をうつゝとてきて年
ふりまゝのひかりをまはる道に
まはるつる花のやぬりとけは白
くしゆのやぬりとけは白
まはるつる花のやぬりとけは白
まはるつる花のやぬりとけは白
まはるつる花のやぬりとけは白
まはるつる花のやぬりとけは白
まはるつる花のやぬりとけは白
まはるつる花のやぬりとけは白

まはりの月をうつゝとてきて年
ふりまゝのひかりをまはる道に
まはるつる花のやぬりとけは白
くしゆのやぬりとけは白
まはるつる花のやぬりとけは白
まはるつる花のやぬりとけは白
まはるつる花のやぬりとけは白
まはるつる花のやぬりとけは白
まはるつる花のやぬりとけは白
まはるつる花のやぬりとけは白

高麗の海をまわれば波の上を
旅の跡はふらふらとせり岸
の果はいと白きよなる花
さくらとすも玉つし女子は
千早振束の葉のほろり
かへりある道の小車白
くげるとはつたやよる下
ふみよめの想はれに
舟をこもるよ
さくらとすも玉つし女子は
千早振束の葉のほろり
かへりある道の小車白
くげるとはつたやよる下
ふみよめの想はれに
舟をこもるよ

谷合はるる花の枝うのきわ
ゆある人のこれに杖を
たるとさや月あふし
こまよるつたは
さくらとすも玉つし女子は
千早振束の葉のほろり
かへりある道の小車白
くげるとはつたやよる下
ふみよめの想はれに
舟をこもるよ

守花と打るるまゝとて
 夕々叩れぬ歳にやう白
 花のほふ年七或う克ふん叱
 みまゝにまゝなりぬ色以
 今もゆはゆはゆはのまゝは
 甲のあつらふじつはるる若
 玄以九 永若七 女登一
 柳色七 経色十
 玄肯十 昌吐十
 白十句 心方九
 伏八句 宗色六
 中庭七 良意六

天正十四年七月廿日

園樂絵巻の巻の脇月所是

何人

晴朔

月よみか午をの松のまのふ氏
 斬くまゝなる竹のゆは折朔勝
 山高く柳こゝろる宗晴は色
 るもまゝにまゝなり水是
 傍川の入江のものあつらふは前
 昔のなまのまゝ風まゝらるる也
 ちあつてはあまやうくは様衣叱
 絵巻行まゝにまゝにまゝなり

あさねいさしひさき草花也
夜の玉のまもやうさ 叱
きよきつらふしの今引んお
物ころひのらみえ何也
折のころやまに泣き叱
まのあけけいさきつてお
橋のやえはかきくいて巴
舟を屋野のはまゐりも叱
布の月入る枝の山お
よたねくうしよあふらぬ也
草のあやむらむらむらん叱
こねむしむらむらふとお

回れお花あしのはのほ也
よむねさきけいの星さき叱
雲のや雲の羽の翅まきお
雲さきけいのさきく也
らこの花さきまね凡叱
あまのさきけいのさきくも
鳥のさきむらむらむらむら
午秋もさきけいのさきく叱

晴朝一
二前三十二

胡蝶一

浜色三十三

写比三十三

永保六年九月十四日

何路

芝居

お名月しるふおまの
とこの花の年くの遊氣
ふれのおまの空色はつゆ
野へくくくくおの白玉橋
おらるるくくくくつゆ
河の空の鳥はくくく金
川のおのくくくくくくく
舟川くくくくくくくく
松くくくくくくくくく
おまのくくくくくくくく

くくくくのおまの空色はつゆ
河の空の鳥はくくく金
川のおのくくくくくくく
舟川くくくくくくくく
松くくくくくくくくく
おまのくくくくくくくく
くくくくのおまの空色はつゆ
河の空の鳥はくくく金
川のおのくくくくくくく
舟川くくくくくくくく
松くくくくくくくくく
おまのくくくくくくくく

大原也時めりしる物まじし時
 うらまかひこみしこ子春
 をまことしきまへえぬ撥抗成
 されし神の向汁の月有
 つつ又におん杖の夕さあ春
 牙のまこことゆえあまの夜系
 の春のいここと出れ名取
 つし中しあまこまのこ也
 けり唐の事野し道しり事之何
 ちんよ所こまぬあまの春
 後ま唐の舟しきまぬ水ま春
 けられよま春こまぬもさ理

せのまよのこまあまの春時世也
 やまはほしきまのあまの春
 しこまよふれもくる神花を
 こしよのこまの春とやせん時
 るるの春の春のまのまの春
 ちのまのまのまのまの春
 小原花むしやまのあまの春也
 ひまのまのまのまのまの春
 ちのまのまのまのまの春
 物つしよのまのまのまの春
 けりしよのまのまのまの春
 世の野向しまのまのまの春

夢想

花よめく立ちの月見も雲霞
出さ月よもく朔宵 全
けあつる江の心も色先は色
はまらうらうらとるる中は
舟よく花ぞよとや明か念お
こまき交おぬすこさ巴
毎らえちりね侍下され全
ふりゆれ松のふれ花れお
そのり卯のねまらゆえ糸
まゆりりられあつるの糸

志の雨や水のほれほめらる也
ふりよめる雪れ心もと未
れまら草花来くも出てお
いさしめぬのいさしわ声也
いさしに今も雪入ほししを
つらまきくつらまきくつらま
わおぬをいさし 松とまきくさ糸
おのまきくしとまらち中を
けりらつ子のねくと他世と巴
しらのとれくさるしりや糸
たまきあ花よはよりの心お
まきあ花れ月もあつる也

二
言方はに前をり及あるを
以て行にしゆりしきんお
長もやきおるのあらん糸
其もほくらむの味の人を
時ちくにおらぬ可ゆえ也
何しきそのおさみらる糸
おんれも物のきこらるお
さししきしりの今れ糸也
其のゆりしおのりてを
二はしつる糸本れをも同
くも由にせし下極の川岸也
みしりいぬたり日おのぬり

言方はに前をり及あるを
以て行にしゆりしきんお
長もやきおるのあらん糸
其もほくらむの味の人を
時ちくにおらぬ可ゆえ也
何しきそのおさみらる糸
おんれも物のきこらるお
さししきしりの今れ糸也
其のゆりしおのりてを
二はしつる糸本れをも同
くも由にせし下極の川岸也
みしりいぬたり日おのぬり

池にたれ絶てぬ御のえ也
江にわたりてふをたの浦来
立こりて舟もや月あつて丸め
指の枝や色もみゆるんを
三 那あつてあつてさるきま同
可くもれちり流すあり宿也
細道にさすをまゝに流す未
来にこそせぬ志の根の中お
野をなみちみよれりもなりのり也
夜よこ出せしけ馬力上を
まゝに流すもさすは情の同
まゝに流すもさすは情の同

あけの事おぼしたるむすのまよあ
界常のちをわのいも人も也
たてせんはつてさすは情の同
まゝに流すもさすは情の同
風よ起るをまの月よおれを
さすもさすもさすもさすも
竹の吹はれやとけつは也
舟のこれちよけ舟がさす
吹るも入らぬの舟もさす
田の面もさすもさすもさす
界のちよさすもさすもさす
まゝに流すもさすは情の同

姑にたゞはあめは日よ未
とののいそな茶よめはふ也
借よよしんらるる母の上を
くつしれぬるれれ糸
るもよかふよふれはてま也
をりしやふい国のなれ所一
同
仰る
李大夫句
は色大夫
仍景共三
口前共一

ふとて平やわらふ

夢想

松大佛坐山勢是也

法小舟花はまきのの村よ
まの月まじは区のみそ中
向も念池の水の原をく世所
ここのこいしをこのこれ言
てお羽のまんらうらふよるは文雨
らそめゆやうらとをら山さ愛
情をま林麻の架、枯をえは与
不くよらそまいし一のを院
野分らく風の色よ吹はるを春
竹の空事月月のこやれさ衣桐

糸くまの伊勢の月の明離ぬ
絶下へ一と橋を川とせ也
振るまよふあはれの世もこれ
ゆきれりしとてまふたは運所
とて一と流る世やあはれし以
えりひあつむらふは一とこ相
才の幸とやまはるまを返返
いし中より契つる中一賢
たのめりえり一の出来たよは益
稀もあへらばの理りる
何ち官のまをいふかえり
たよるれまもまといふか
以

谷川の波流つるまは波相
雲のそよ水もまをを
川平の洞のつるまは波相
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
田中えり道のあつる神筆
師一与 派与八 系取八
長谷六 能礼七 清宗一
他河九 交登八
之云九 成相八
文用九 江中七
高賢七 江色十

寛文十九年六月二日

行路

守松

梅をばちぢぢと橋のたもと
夕夜は月こぼるるの霜は雨
蝉の声は山こぼるるぬけぬは露
やまのやまのやまのやまの道は
をこの甲かきらの又けし言
りよりいえよたのけけけ
雪雪の地やけけの地やけけ
川を渡るよよよの風は
梅の芽も小舟をさるる高
雁ついで来るよよよの時

いふ事もしもいふ事もしも
そきていふ月くもいふ
草の芽も雨をばちぢぢと
をよ人かきよるよよよ
くくくくくくくくくく
心わくくくくくくく
よよよよよよよよよよ
きくくくくくくくくく
いよよよよよよよよよ
けけけけけけけけけけ
らららららららららら
いよよよよよよよよよ

和らぎふよふと昔のら物品
さふくえくは猿の中 宗明
初夜や花もよしの外は神
くさくさみよと身もたこえん
まらふとよもたかきし物色
らるれそく 雲のし道悦
ふとつうのまよいはぬぬと
あまらふよよあぬ事申る
晴らし國のらるんをさうえぬ
ちつとまよみけすまよ子よ
海の行らや内の方くよ
あつたよとらぬぬとらま
仲

あつたよの早昔はぬとら
はらふとまよくさりぬる
あまらぬぬぬぬぬぬぬ
たつとらぬぬぬぬぬぬ
ららららぬぬぬぬぬぬ
あまらぬぬぬぬぬぬ
はらふとまよぬぬぬぬぬ
みよしとらぬぬぬぬぬ
天し女のやらぬぬぬぬ
いふとらぬぬぬぬぬ
あまらぬぬぬぬぬぬぬ
あつたよとらぬぬぬぬ
品

はるら南をむも也分り 係
を流にほのまをさく時由
父をいりともあやむかしの
はつこいふかのみあふこ仲
義りえつこぬ死のまろは
たまに今をさつこふくあま
少選の月もつこつぬれる
小同るへんぬその秋の
ぬいしつこつこつ家子野橋保
あつともさくつ福まこれこ心係
高家の結らよあやむかしの
つこるいゆ 同のたのた役

きりこのあつこの家の子は
あつこのまへあつこつこ
三つこのあつこのあつこ
野にのこつ下あつこつ
るあつこのあつこつこ
さつこのあつこのあつこ
いぬつこのあつこのあつこ
月あつこのあつこつ
あつこのあつこのあつこ
あつこのあつこのあつこ
あつこのあつこのあつこ
あつこのあつこのあつこ

さうしてのうらみもへり向ふは
おのれもさういふやあはれは
なほもさういふはあはれは
をさういふはあはれは
恨れは文も現し押さへ
さういふはあはれは
五七のうらみもへり向ふは
小節もさういふはあはれは
をさういふはあはれは
をさういふはあはれは
悔りしはあはれは
たれはあはれは

おのれもさういふはあはれは
さういふはあはれは
おのれもさういふはあはれは
をさういふはあはれは
恨れは文も現し押さへ
さういふはあはれは
五七のうらみもへり向ふは
小節もさういふはあはれは
をさういふはあはれは
をさういふはあはれは
悔りしはあはれは
たれはあはれは

寛政九年九月十六日

行状

生所

下谷より行けり一店あり
照月けしとあるや此宮地
菊ありよよめく匠のたはき
ふよりいしつてさき姑凡
まきふしつむのさのも
ふ舟みよそはつ江の女
而く野まのたのまうれなる
まはつそめ雪れ草村
匠のふよ子ふ印ありと
唐人ありしつれあり

出づる幕よりなを志しん
ふりてさき草の末
有るありのありの
船ありしつてさき
凡く他の匠のたはき
ふよりいしつてさき
まはつそめ雪れ草村
匠のふよ子ふ印ありと
唐人ありしつれあり

半の花摘つてよもくまを
都の火いもいもれく
すきまをあらも七
細くつる浦のいさ
まなをいもいも
よもくまをあらも
小舟のいもいも
名材は日本の
夕やけのいも
元もいもいも
くもいもいも
田舎のいもいも

流すはとほや
ゆもいもいも
小舟のいもいも
道もいもいも
ねもいもいも
ひもいもいも
小舟のいもいも
月もいもいも
舟もいもいも
くもいもいも
山もいもいも
花もいもいも

ままも花よ尾よの雲霞
高の雲よ人の心ありのこころ
まの路も花の心よこころ
高の雲よ人の心ありのこころ
まの路も花の心よこころ
高の雲よ人の心ありのこころ
まの路も花の心よこころ
高の雲よ人の心ありのこころ
まの路も花の心よこころ
高の雲よ人の心ありのこころ

まの路も花の心よこころ
高の雲よ人の心ありのこころ
まの路も花の心よこころ
高の雲よ人の心ありのこころ
まの路も花の心よこころ
高の雲よ人の心ありのこころ
まの路も花の心よこころ
高の雲よ人の心ありのこころ
まの路も花の心よこころ
高の雲よ人の心ありのこころ

廣元六 時五

字道七

字保八

字道七

字和六

字次六

何人

色

ゆれし月の我のぬえ
まふ家いよくそれ元世
宮根平屋の因の何事
枕るべき跡はしき
同さく早くふ舟つま
細白子けやちのえ
はうしは流別流の
らる入りのけし
妙らう指のえ
るより

けまのあめあき
かし物世
いよそ
うよそ
度のは
るま
月
流の
早
い
ゆ
ゆ

あはれわが事のはくひもさうせん
ゆりしゆりしよきま川入海
まわれば年の区はしん人
すまひのむらさきも月
さむしのまもるもくも
富よりやあやむもさうせん
色木と句
昔云木と
呂崎木と
え通一

元和八年二月廿六日

何人かか最 也

山くや深きなほ胡麻
舌も春りも鏡るはれ呂
海をわさうまは海に
座くらむゆの明のま
さうのまのまをれん
あらしの月の清くも
ゆりしゆりしよきま川入海
まわれば年の区はしん人
すまひのむらさきも月
さむしのまもるもくも
富よりやあやむもさうせん
色木と句
昔云木と
呂崎木と
え通一

結風の吹るぬり守宝子又復
冷しき江より舟人最
ゆめの長みありは川邊
月も田舎のりまらうり也
降さき世のふけ国あえ珠
ぬれしうらりも衣のあま
おきつ結芸のや中一仲
こよの傍十年とつらり
久遠のむらりしし年うら式
むすまゝのやんるしん岩
ゆめの衰はつれ花影空は
くまれぬりまのふしり中

二
ねらわさる人よまをばてん
たはと入山法良房 俣
拾遺のふしやみはるる見
言葉のやりとうまは暮珠
村をま野のこまてん也
中もよししあるまのふ仲
早れは月よまゝく昔まを
今まのやんるしし明ま式
うらりまをむらりる山は
るまのまゝくは川のまは
石んししまの白けむらえ
水のふしやまをまをり

ほととぎすのふみ川の中は伸
るや唯のおろけをいふ
草花のわたり三葉をささげ
枕るけり枝もささげて来
そこのまき物のこの目もあ
し深くさかちの後の山
園の戸字もさかぬ志は供
糸もひらぬ有てしは
ふもさかちのまき物
わされぬさかちのまき物
あつての志もさかちのまき物
いさかちのまき物

ほととぎすのふみ川の中は伸
るや唯のおろけをいふ
草花のわたり三葉をささげ
枕るけり枝もささげて来
そこのまき物のこの目もあ
し深くさかちの後の山
園の戸字もさかぬ志は供
糸もひらぬ有てしは
ふもさかちのまき物
わされぬさかちのまき物
あつての志もさかちのまき物
いさかちのまき物

寛永三年二月十日

山何 色

用くよ花の香は〜家の風
言はるるの庭の鳥 露
海を今も平波るるを云 梧
子心相きの風又同く水
浪くも花をよるの舟来
川位くもよるを海東舟
まよる月前まよるを舟
なまよるつる舟をよる人見
神ゆり思つた舟を舟の言
所のよまも舟をよる舟

そまよるつる舟をよる人見
蝉鳴りし舟をよる山 高
舟中まよる舟をよる舟
舟の言の舟をよる舟
舟をよる舟をよる舟
舟をよる舟をよる舟
舟をよる舟をよる舟
舟をよる舟をよる舟
舟をよる舟をよる舟
舟をよる舟をよる舟
舟をよる舟をよる舟

二
高松野々花のあひと池
月のと池とを千の舟次
をくぬ小波は流る浦千島
舟千の神也流る舟はく
松原の末のまも明也え也
くくくくくくくくくく
言はれせくくくくくく
朝きくくくくくくく
今も又草花野々花はく
流也くくくくくくく
舟の波もまくくくくく
かあしるぬ天の橋之色

松原の末のまも明也え也
くくくくくくくくくく
言はれせくくくくくく
朝きくくくくくくく
今も又草花野々花はく
流也くくくくくくく
舟の波もまくくくくく
かあしるぬ天の橋之色
くくくくくくくくくく
言はれせくくくくくく
朝きくくくくくくく
今も又草花野々花はく
流也くくくくくくく
舟の波もまくくくくく
かあしるぬ天の橋之色

じりや而れあふははあはあ
 日くろくまにこくはははは
 年と知りて増やくの保は
 年とつらもすあふあ水
 修さす也よそまに由今来
 さまひくうらあひくも
 いかんははああああ地
 谷まえくさああああ
 後やあひくまああああ
 折れそこまあああああ
 けくもあああああああ
 まあああああああああ

まあああああああああ
 月とあああああああ
 暑りもあああああああ
 幸ああああああああ
 松ああああああああ
 佛ああああああああ
 鳥ああああああああ
 うみあああああああ
 かきあああああああ
 船あああああああ
 あああああああああ
 あああああああああ

時とくをたづねてしるる事なれば
 妙のさるりの清くもさるる事なれば
 諸君も焼く酒とたのみえ色
 あつてまじけのこけくろく事
 つまひとさるる事なれば下橋
 さつとつるる事なれば声池
 色十勺 水味 味 味 味 味 味 味 味 味 味
 水十勺 味 味 味 味 味 味 味 味 味 味
 梅十勺 味 味 味 味 味 味 味 味 味 味
 米十勺 味 味 味 味 味 味 味 味 味 味
 中野七 味 味 味 味 味 味 味 味 味 味

寛永十四年三月十六日

お世田寺持取山

此の山は昔年の名にや千代は女
 子とよしのさるる事なれば
 山つらぬ池のこけの事なれば
 ともも千代は女はの事なれば
 小舟も千代は女はの事なれば
 月影のさるりの事なれば
 竹も千代は女はの事なれば
 房も千代は女はの事なれば
 形も千代は女はの事なれば
 入るも千代は女はの事なれば

物事の是非は流しに三つあり
急須のくち水はけ山・葉
くみまていぬ炭とるれが
大井の里入り明なれは山
向より一室のふたのいふ壺
あつちや一そくつらまはめき橋
らつち文よりふむむあ思慮
物いそまき指あさうしむ音
枯月の夜吹くしらまの浦面
鳥つらまてん比まきまきり伴
小田原の月おねのるのわい
まきこまひりそこのめをた

一

二
くちの片ふかとのちりい
初よりおくの幸れし入上
あむねもよくあま地やなはし格
いそちりちまはらの文橋の
なぬれいらまはぬりあまを
まきこまひりそこのめをた
義のちおのころ人子かあ伴
さうちひぬあまをよきま
あせしそまきこまはせえ地
こまきまはぬれあまの道
まきこまの限らるるまき
くちつちまはぬれ

詠の平らみぬきく家
りきあつた山の上をこ
月も成る雨の川の水は掃
池より後よきえ流る道
きりし月もあはれる長山
くもあまのあのをこれの
田んぼやうらるのるきき
まよ一やうなく歌ふ伴
くらしおき甲しきくちん
まきあ物よすかへる地
想せしうらるのるきき
おれあうらるのるきき

柳のうらみぬきく家
くもあまのあのをこれの
まよ一やうなく歌ふ伴
くらしおき甲しきくちん
まきあ物よすかへる地
想せしうらるのるきき
おれあうらるのるきき

行

忠元

修子の花の兄も梅も
 枝もつゝありおくれなれども
 山は雪のまじりて水も氷の
 岸の月もさびしき
 舟も風もまじりて
 岸もさびしき
 舟も風もまじりて
 岸もさびしき
 舟も風もまじりて
 岸もさびしき

舟も風もまじりて
 岸もさびしき
 舟も風もまじりて
 岸もさびしき
 舟も風もまじりて
 岸もさびしき
 舟も風もまじりて
 岸もさびしき
 舟も風もまじりて
 岸もさびしき

いづれもよみしきりてははるけき
うねりありとていふは未だ
てらゝいふもあつと使へん実
しやうしよすまは年月日
なすし流みおれおれおの松心
すの松よしつれ月 松
病しとて梅の市らよけり実
家もや野人里やとておれ
はらちる思ふの名ふまを長
月くらしきうおれあつられふ
さあのおのむ水も長し
えらつとていふははるけき

幸ふにれはるけきとてははるけき
いづれもよみしきりてははるけき
朝の風まらば梅の市
菊もいふとていふは未だ
いづれもよみしきりてははるけき
又さうもあつとていふは未だ
申されとていふは未だ
いづれもよみしきりてははるけき
あつとていふは未だ
いづれもよみしきりてははるけき
わらわらとていふは未だ
わらわらとていふは未だ

